

学生大使 実施報告書

氏名：大佐賀啓伍

学部・学科（コース）・学年：地域教育文化学部・地域教育文化学科（文化創生コース）・二年

派遣先大学：ガジヤマダ大学

派遣期間：2023年8月29日～2023年9月13日

1 日本語教室での活動内容

平日の10:00～11:30/13:30～15:00という2回の授業であった。派遣された山大生は13人で、それに対してガジヤマダ大生は10人～30人が参加してくれた。ガジヤマダ大生の人数は日によって、また、午前・午後のクラスによってばらつきがあった。初めは現地学生の日本語のレベルによって初級・中級・上級で分けた。しかし授業によって参加人数が異なり、かつ遅れて参加する人が毎回の授業でいたため、日本語のレベルで分けるということは途中から行わず、山大生が異なったレベルの、かつ複数の学生を担当する形を取った。私は毎回の授業で2人を担当することが多かった。その2人が同じくらいの日本語レベルであれば授業の進め方で苦労する部分は少なかったが、その2人のレベルが違う場合、それぞれのレベルにあった内容で授業を進めなければならない、工夫が必要であった。ここには特に難しさを感じた。

私が授業を進めていく上で最も大切にすることは、授業に来てくれた学生が退屈だと感じないような進め方にあることである。すでに知っている内容を教えるのでは退屈さを感じさせてしまう。そのため相手が何をすでに学んでいて、今は何を学びたいのかを聞く必要があると思った。日本語の五十音や自己紹介など日本語の基礎となる字・表現は重要であるが、相手の意欲・進度に合わせた授業にすることは忘れないようにした。五十音に関しては、初級者に日本語の五十音表を教えることは必要なことであり、初級者にとっては初めての内容であると思うが、中級者や上級者にとっては退屈な内容となってしまうことが考えられるため、その場合、それをメインに授業を行うのではなく、相手がつまづいたときに五十音表を見せる程度にとどめるのがいいと考え、そのように授業を進めた。さらに工夫した点としては、授業の初めに日本語のレベルが初級か中・上級か、また、日本語を話す・書くことのどちらを勉強したいかを聞くことにした。そこで方向性を決め、授業を行う上で必要な内容を日本から持参した参考書などをもとにし、相手に合わせて毎回の授業で考えるようにした。

2 日本語教室以外での交流活動

ボロボドゥール寺院やマリオボロ通り、海、映画館、現地学生の家など二週間で多くの場所を訪れることができた。昼や夜の食事の時間には日本語クラスに参加してくれた学生のみなさんも来てくれて食事を一緒に楽しむことができた。夜、夕食後などにロビーで山大生や常に同行してくれる現地学生の皆さんと一緒に過ごす時間は一日のリフレッシュとなる時間でとても楽しかった。常に私たちに同行してくれた現地学生のみなさんに感謝したい。

さらに、私はプランテーション現地実習（茶とカカオ）という現地の正規プログラムにも参加さ

【学生大使 実施報告書】

せていただいた。それは茶とカカオの製造過程を学ぶプログラムであり、英語での説明が聞き取れない部分も多くあったが、実際の作業工程や機械を見ることができた。特に、大きなカカオの実を生で見るなどの体験は日本ではできない事であったと思う。

3 参加目標への達成度と努力した内容

一度は海外に行って日本とは違う景色を見たい。日本とは異なる環境に身を置いて様々なことを体験してみたい。もし私が海外に行ったら何をし、そこで何をどのように感じるのかに興味がある。そのような思い・考えから参加を希望した。私としては、飛行機に乗り、現地に着き、現地の人（学生）と一言会話を交わすことができればかなりの進歩だと考えていた。その点では達成度は100%である。また、初めて海外に行き、英語を使っての今までにないくらい多くの会話を現地学生と交わすことになることはわかっていた。その中で、私が伝えたい内容を伝えきれないなどの場面も多くあるのではないかと思っていた。実際にそのような場面は多くあり、自分の力不足を実感した。しかし自分の力不足を自覚したまま、できる範囲で向き合おうとしたことは良かったのではないかと思う。自分にできる範囲で頑張ろうと決めていたため、その点での達成度は75%である。さらに、相手に合わせた授業を心がけるという点での達成度は80%とする。

4 プログラムに参加した感想

日本語を教えることがこのプログラムの主な目的であると思うが、その活動を通して現地学生と仲良くなったり、気づきを得られたりすることが多かった。私たちと現地学生をつなぐものとして日本語や日本に関すること（漫画やアニメなど）が間に入っていたため、コミュニケーションを取りやすかったのだと思う。この点は一般の留学などの体験では感じづらいのではないだろうか。

日本との違いは交通、食事、建物、設備、宗教などの面でももちろん存在した。このプログラムに参加してそれを体験できて良かったと思う。観光で海外に行く場合は不自由だと感じることも少なく、不自由さを避けることも可能であると思うが、今回、現地の日常生活のそのままの姿を見て、体験できたことは異文化を肌で感じるうえで重要であり、本当に貴重な時間だったと感じる。また、インドネシアでも日本と同じように学校があり、仕事があり、日常生活が営まれていた。そのため、生活する上での根底にある人々の考えや物事/社会の仕組みは、日本とインドネシアで違いはあるけれども、決してかけ離れたものではないと感じることができた。また、そう感じられたからこそ私はインドネシア滞在中、自然体でいられたように思える。

5 今回の経験を踏まえた今後の展望

様々な言語に興味のある学生、日本で生活してみたいという思いから日本語の勉強に励む学生、日本語能力試験の勉強をする学生、など様々な思いや考えを持ったガジャマダ大生と日本語クラスで出会うことができた。語学力を向上させるために努力する学生が海外にもいることを実際に会って実感し、私自身刺激を受けた。日本語学習方法として動画を見て学んでいると答えてくれた学生が多く、言語を学ぶ手段は様々でよいのだと実感した。実際そのような答えてくれた学生の多くは日本語を話すことができていた。私は学習方法をもっと柔軟に考える必要があると思った。今回のプログラムで実力不足だと再認識した語学力の勉強に関して、どのように取り組んでいくかを再検

【学生大使 実施報告書】

討していきたい。



帰国前日の集合写真

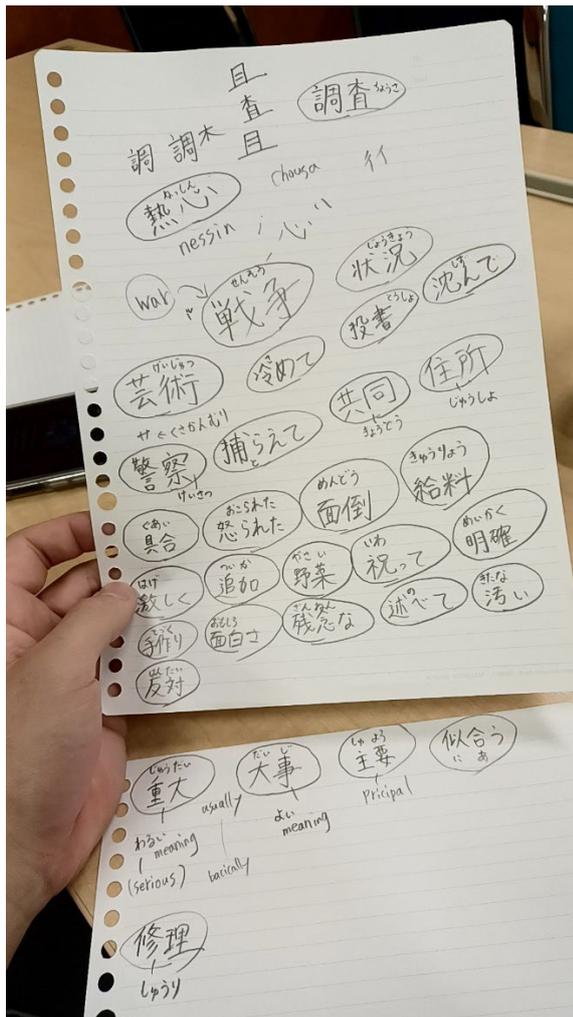


揚げた鶏肉をほぐした料理

【学生大使 実施報告書】



宿舍のトイレ・シャワールーム



日本語クラスでの漢字練習